高齢者の豊かな生活のために　　２０２３年２月１日発行

手 賀 沼 通 信（第２９９号）

Ｅメール：nittay@jcom.home.ne.jp　http://ynitta.cocolog-nifty.com/blog/　新田良昭
http://jfn.josuikai.net/semi/koyukai　http://tegatu2.web.fc2.com

今月は弟から届いたエッセイ２編をご紹介いたします。

本人の言葉によると、「最近文章を書くのが苦手となって、もう止そうかと何度も思いますが、止めたら老いのスピードが上がると、何とか続けています」とのことで、いつもより短い内容になっています。

私も同じことを感じています。理由は高齢のためです。私は８６歳、弟は４月末には８５歳となります。

特別寄稿

田んぼを眺めながら　新田自然

９月半ばになると、ここ親水公園を取り囲む田んぼにも、稲刈りの準備が始まる。引地川上流の堰が閉じられ、用水路から水が消える。だんだんに田んぼの土は乾燥し、ひびが入る。茎から水気が抜け、「藁色」になってきたら、稲刈りのゴーサインだ。

穂が黄金色を増し、畔には彼岸花が咲いて紅い。刈り取った稲は稲架（はさ）に架けられ、赤とんぼがその間を行ったり来たり…と、これが従来の秋の稲作風景であった。

しかし、今の田んぼは様子が違っている、ほとんどの田んぼは、稲架掛けして乾燥させないのだ。いきなりコンバインがやって来て、刈り取ってしまうのだ。稲はその場で脱穀し、籾と藁に分離、藁は束となって並べられる。籾は乾燥され、後日農家に戻ってくる。

いわゆる専業農家では、もっと他のやり方があるのかもしれないが、こういったやり方が、このあたりの兼業農家での一般的なやり方だそうで、人手不足の中、機械化と省力化が進む、まあそれはそれで仕方がない。

今年は田植えから稲刈りまで、じっくり眺めて来た。いろんな人たちから話を聞きながら、一日一日、稲が延び育ってゆくのを見るのは楽しいことであった。

ここにもう一人、私と一緒に眺めてきた人がいる。鈴木さん、８６歳、私より２才も上、そして私以上に熱心に、稲を眺めてきた人がいる。

鈴木さんは山形の朝日連峰山麓の農家の生まれである。１０人兄弟の６番目、次男坊である。「貧乏百姓でよ、兄貴だけ死んじまって、あとはみな元気だ」鈴木さんの喋りは、田舎の言葉と、その後に移り住んだ地域の言葉が入り混じって、わかりにくいところがある。

ふるさとは雪深いところで、昔は２メートルくらい降った。家は藁屋根で、暖は囲炉裏でとった。戦後のこととて、いまのように機械で雪かきをすることもなかった、雪に階段を作って家の出入りをしていた。中学校まで行ったが、高校は遠かったので行かなかった。米作りは２０歳ころまで手伝ったが、次男坊のため家を継ぐわけにもいかず、独り東京に出た。昭和３０年初頭のころだった。その頃の東京は道路ブームで、近郊の道路づくりをやった。その後重機の運転や電気工事の仕事に就き、定年で職を辞し現在に至っている。今は奥さんと二人暮らし、「足が不自由だが、なんも言うことはない」と。

なにか鈴木さんの生い立ちの話になったが、本当は米作りをしたかったが、次男坊であったため、それが果たせなかった、そこに鈴木さんの米作りに対する愛着、執念を垣間見たように感じたので触れた。

５月、田植えしたばかりの田んぼはみずみずしい。鈴木さんはたぶん朝日連峰の雪を思い浮かべているのだろう、「この頃の田んぼが一番いい」。そんな言葉を３回くらい聞いた。田植えのとき、稲の花の咲いたとき、稲刈り直前、いつもこの言葉を吐いた。たしかにどの時分の田んぼも美しい。

「分蘖(ぶんげつ)」という言葉、私には初めて聞く言葉だ、田植えした稲が根付き、枝分かれすることを言うらしい、「１５本くらいかのう、稲は強いもんだ」。植えた時は２・３本の稲が２０本から３０本くらいに、見事に分蘖している。この間、いろんなことを教わった。

７月、青く育った稲の先が膨らみ、白い花を咲かせる。その頃の田んぼは稲の花の匂いがする。田植えした稲田の匂いは土と水の匂い、稲刈りの時は伐り株の匂い、田んぼは３回、匂いを変える。深く息を吸い込んでみる、刈田の匂いは一段と強く香る。

飯島さんという地元の農家の人とも話をする。歳は私とさほど変わらないと思われる。家は代々農家だったそうで、この地にも古く、言い伝えによれば、甲斐武田家が滅亡したとき、ご先祖がここに落ちのびてきて以来の農業だと。

「もう誰もやらなくなって、俺も止めたい、孫のため少しばかりやっているようなもんだ」

「歳を取ったで」、田植えは田植え機を借りて来て自分でやるが、稲刈りと脱穀、乾燥は機械でやってもらい、籾で受け取っているそうだ。

「機械の順番待ちで、稲刈は月半ばになるか」。一反で約３００坪、収量で８俵くらい。費用はいくらかかるかと訊くと、堰から引いてくる水代、早苗代、肥料代、田植え機の借り賃、農薬代、稲刈一連の費用、そんなこんなで、なんぼも残らないそうだ。「俺の手間賃はタダだ」。だけど飯島さんも田んぼの作業がとても楽しいようで、(必要もないのに)手製の案山子などを２本も立てている。

私の祖父も、四国で米作りをしていた。遠い山村の生まれで、長男でもなかったゆえ、ふるさとを捨て下駄職人になった。米作りが忘れられないのか、下駄屋の傍ら米作りもやっていた。一年中水の引かない泥田で、田植えから刈り取りまでをやった。稲刈は箱舟のようなものを作り、刈り取った稲はそれで運び出した。今から考えると、大変な作業であり、戦時中でもなかったら、とても出来ることではなかった。

それでも祖父はなぜか楽しそうであった。田植えと同時に、鮒や鯉を放ち、大きくして収穫した。田螺や食用蛙も捕って来て食った。私は淡水魚が苦手であったが、田螺と蛙は美味であった。米作りはそんなに楽しいことなのか、生きていればぜひ聴いてみたかった。

「雀がいないぞ」と鈴木さんが言う、たしかにこのところの田んぼが静かなのである。以前は実るころになると、百羽以上の雀が群がって、気配がすると羽音を立てて一斉に飛び立ったものだ。そのことについて話し合ったのだが、ある人は住宅がのっぺりしたものになって、軒がなくなって巣をつくれないのだと、もっともらしいことを言う。飯島さんに訊いてみた。「わからんけど、鷹の巣が近くにあるらしい」。たしかに公園の東屋で雀に餌をやっている人がいた。その人が来る時間になるとまわりに雀が来て待っていた。私も記憶があって、それは数年前、がんで入院する前のことだと思い出した。ということは２・３年で住宅の形式が変わったとも思えず、鷹がこんなに人里近くにいるとも考えられない、小型の猛禽類かも知れないが、原因は分からずじまい。飯島さんは「多少米は食われても、雀はいたほうがいい」と笑う、そういえば(役に立たない)案山子も作ったのに。

「あの頃はよう、イナゴもいっぱいおった」と鈴木さん。そう、終戦直後の稲田は、いまの雀騒ぎより大量のイナゴで沸いていた。どうやって持ち帰ったか、という話になって、私の経験を話した。稲が実る頃にはほかの野草、名前は知らないがエノコログサの茎をもっと頑丈にしたような草に、３０匹くらい串刺しにして持ち帰った、と言ったら「俺たちのところでは、手ぬぐいを縫い付けた袋に入れた」という。稲作に付随する文化も違う。

「最近の稲は短くなって、これでは縄もなえん、せめて７０センチぐらいはないと」。稲が台風などで倒れてしまうと厄介なので、品種改良され丈が短くなり、強くなったそうだ。それで縄がなえなくなったと、鈴木さんは言う。

そういえば祖父も縄をなっていた。手に唾し、５・６本の藁を二手に分け、足を重しにして撚りを掛け、ないあげてゆく、出来上がった藁縄は稲束を作るにも利用され、いろんなものを括るにも役立った。適当に強くて適当に弱い、藁縄は便利に使用されていた。

藁や縄を使って草鞋を作っていたとも言う。莚だって、正月のお飾りだって、さらには土壁の補強にも、藁灰さえも囲炉裏に使った。「捨てるものはなんもなかったよ」

眺めている田んぼで２枚だけ様子の違う田んぼがあった。「田んぼで遊ぼ」と板書きされたものが立っている。何でも数十年続けてきた農家のご主人が亡くなって、奥さんが「一人じゃできない」と賃貸に出したそうだ。借りた人はだれかよくわからないそうだが、看板からすると地域の団体で、それも子供の教育か親睦に使われているのかもしれない。

田植えも手植えだった。素人が手で植えたことが分かるような、ぐにゃぐにゃしたラインで、稲の本数も統一されてなかった。１本だけのものもあった。米は強い力を持っているのか、それらが育つにしたがい、「分蘖して」様になっていったのである。他の田んぼ同様に黄色く実って来たのだ。心配して見つめてきた鈴木さんも私も嬉しくなっていた。

ある日案山子が立った。全部で７本、オバキュウ、海賊、女の子、仮面、みんなマンガ等で知っているものだろう。全てがこちらを向いて立っているのだ。「雀もおらんのに」。

他の田んぼでは稲刈が進んでいるが、ここだけは、たぶん最後まで楽しむのだろう。当然ながら稲刈は機械ではしないだろう。稲刈りが終わってもすぐには片づけず、藁小屋を作ったり、お芋を焼いたりするのだろう。

まだこれで終わりではなかろうが、充分に楽しませてもらった。なにしろ毎日毎日眺めつづけて来たのだ。稲刈りが終わったら、来年に向け、田んぼをしっかり休ませてやりたい。鈴木さんも、飯島さんも、来年の米作りを楽しみたいと思っている。それにはお互い健康に留意して、来年まで頑張らねばと。(2022/10/15)

特別寄稿

「大庭」の歴史を感じながら　　新田自然

地名はその土地の地形、建造物、風俗、動植物などに由来してつけられたものが多いと言われる。多くは自然発生的に生まれ、いまでいう「小字」ができ、集合して広い「大字」となっていったのだろう。その後、その時々に変えられたものもあるだろうが、元のまま残っているものもある。時間がたってしまえば、それやこれやも「古い」地名となって収まっている。そして地名から姓が生まれた。

「大庭」という地名は広い地域を意味するようで、律令時代あるいはそれ以前からそう呼ばれていたのだろう。後になって荘園が発生し、「大庭御厨」という地域名が伊勢神宮の書物の中に出て来る。長治年間（1104）この地を開発し、伊勢神宮に寄進したのが鎌倉権五郎景政で、浮浪者を集めて荒れ地だったこの地を開発したとある。御厨とは地域の特産品を納め税を免除される荘園を意味し、そして荘園の名を冠して「大庭氏」が誕生する。

源義朝・平清盛の争いが起こるまで大庭御厨の経営は安定していたようだが、治承４年（1180）頼朝が挙兵し、鎌倉時代となって混乱があり、どちらかにつかざるを得なくなり、大庭氏は二手に分かれた。平氏についた大庭景親は殺され、さらに和田合戦があり、大庭氏は滅亡する。ここらあたりは、ＮＨＫ大河ドラマ「鎌倉殿の１３人」でドラマとして放映されたが、細部はともかく大筋としては事実に沿った構成となっているようだ。

その後鎌倉（北条執権政治のもと）、室町（管領上杉氏のもと）の時代を経て、上杉氏執事太田道灌によって大庭城が再建された。道灌の江戸城築城は長禄元年（1457）と伝えられるが、それと前後して大庭城も再建されたものと推定される。「城山」、「駒寄」、「城下」、「二番構」外の地名は、大庭城に因んでつけられたものと推測される。

北条早雲が大庭城を攻撃してきたのは永正９年（1511）であり、周囲が低湿地である大庭城はなかなか落ちなかったようで、舟地蔵の伝説が生じた。

舟形をした台座に乗っているのは老婆の姿をした地蔵で、湿地の秘密を教えたため城は落ち、秘密保持のため老婆が殺されたという悲しい伝説である。地蔵様は「舟地蔵交差点」横に祀られ花が絶えることはない。

後北条の時代はこの地は安定していたようである。

そして江戸時代を経て現代にいたるのであるが、ざっと有名人が登場する部分の抜き書きを辿って来ただけでも疲れるくらいの歴史の積み重ねがある。

その頃は大庭城も役を終え、廃城となっていた。この地は東海道の宿場町からも離れ、大山街道や江ノ島道などがクロスする繁華街からも外れ、雑木林の点在する里山の中にあった。だから地形も地名も比較的中世がフリーズされていたのだろう。ちょっとした地名であっても、神社の名前、あるいは小中学校や交差点、バス停の名前などにちらっと顔を覗かせていたりして、現代っ子たちがごく当たり前のように地名を使っている。後の人達が、いくら新しい名前をかぶせても、古い地名はしぶとく生き残っている。

この小文を書くためもあって、先日鎌倉に「御霊神社」を詣でた。そこは江ノ電長谷駅に近く、道は長谷寺を経て大仏に続いている。この神社は鎌倉権五郎を祀った古社で平安末期に建てられたという。長谷寺や大仏への道は人があふれていたが、御霊神社への道は閑散とした住宅地であった。境内には 10 名ほどの参詣者がいたがゆったりしたもので、タブや銀杏の大木があって、銀杏の実が落ちていた。お社は何度か災害にも遭っただろうが、木造の社殿は威厳さえ備えて落ち着いていた。鳥居の前を軋ませて江ノ電が横切り、そのたび「カンカン」と踏切の音がした。

鎌倉権五郎は勇猛果敢な伝説を持った勇者で、全国に勇名を馳せ、各地にいくつか祀られており、多くが「権五郎神社」とも呼ばれる。

鎌倉権五郎は「後三年の役」に従軍し、敵の矢で目を射抜かれてもひるまず、相手を射殺した後、味方に矢を抜いてくれと頼む。仲間が顔を踏みつけて抜こうとしたら、「敵の矢に当たって死ぬことは本望だが、武士の顔を踏んずけることは許せぬ」と刀に手をかけ、味方に跳びかかろうとさえした、という逸話の持ち主でもある。そのあたりから「武士」のルーツの様な存在と崇められるようになったのかもしれない。

荘園の名経営者でもあったのだろうが、そんなことから権五郎信仰のようなものが生じたのだろう。一族から梶原景時、上杉謙信も出てきている。歌舞伎「暫く」の主人公でもある。

いまベランダから「大庭城」を眺めながら、この文を書いている。権五郎が開発した「大庭」の上にわれわれは住み、今では「湘南ライフタウン」などと名づけているが、時代が変わっても、昔からの「大庭」の名前は簡単に消えるものではあるまい。私達が去った後、次の年代の人達が快く歴史を辿ってゆけるよう、心して住んでゆきたいものである。(2022/11/15)

楽しみなＷＢＣ

昨年末はサッカーのワールドカップでの日本の大活躍に日本中が湧きました。

今年は３月にＷＢＣ、９月から１０月にはラグビーワルドカップが開催されます。また日本中が興奮に包まれることでしょう。

ここでＷＢＣについて簡単にまとめてみます。

ＷＢＣ（ワールド・ベースボール・クラシック）は２００６年に始まった野球の世界一を決める大会です。過去４回開催され、今年が第５回大会というまだ歴史が浅い大会です。

・第１回　２００６年　日本優勝　王貞治監督
　　ＭＶＰ　松坂大輔
・第２回　２００９年　日本優勝　原辰徳監督
　　ＭＶＰ　松坂大輔
・第３回　２０１３年　ドミニカ優勝　日本ベスト４　山本浩二監督
・第４回　２０１７年　アメリカ優勝　日本ベスト４　小久保裕紀監督
・第５回　２０２３年　栗山英樹監督

決勝戦は各大会ともアメリカの球場

第５回大会は２０ヵ国が参加します。５ヵ国ずつの４組に分かれ総当たりで戦い、上位２チームが決勝トーナメントに進みます。日本は、日本、韓国、オーストラリア、中国、チェコのＢ組です。試合は３月９日から東京ドームで行われます。

決勝トーナメントは準々決勝は東京とアメリカで行われ、日本が準々決勝に進んだ場合は３月１６日に東京ドームで戦います。準決勝と決勝戦はアメリカの球場になります。